

## バラの花と文学作品

梅雨の曇り空のもとでも艶やかなバラの花は人の心を優しく満たしてくれます。純潔の象徴である一方、官能的な喜びや恋慕の感情を喚起させるエロスもあります。そっと触ってみたりやさしく抱かれてみたいような気さえしてきます。花言葉も数え切れないほどありますね。代表的な色についてネットで：



赤：「愛情」「美」「情熱」「熱烈な恋」「あなたを愛します」

白：



「清純」「純潔」「深い尊敬」「私はあなたにふさわしい」

ピンク：「しとやか」「上品」



「可愛い」「美しい少女」

黄色：「友情」「友愛」「平和」「献身」「嫉妬」



紫：「誇り」「気品」「尊敬」「高貴」

などがありました。

バラは文学作品の中にも多く登場しています。

マリー・アントワネットの名がつけられたバラは大輪花ではなく、中輪のフロリバンダローズです。色もアイボリーという静かな色合いで、晩年のマリー・アントワネットを想起させるような花です。この名前、池田理代子作品の「ベルサイユのばら」で、彼女と彼女を取り巻く人々が否応なしにフランス革命に引きずり込まれる様子を華やかに、ロマンチックに、哀しく描いています。史実に基づいていてフィクションとはいえフランス革命の一端を知ることができそうです。

10年ほど前にシェイクスピアの作品の舞台・イタリアのヴェローナを訪れました。ジュリエットが二階のバルコニーでロミオへの恋心を語る名場面の台詞に「薔薇もロミオもどんな名前と呼ばれても魅力は変わらない」とあります。名前よりも内実だ、とロミオへの募る心をバラをもって喩えたのでしょう。

海を越えたカナダのプリンスエドワード島の「赤毛のアン」の舞台では、主人公アンが（暗にシェイクスピアの上記の言葉を念頭に）「そんなこと信じられないワ。名前こそ大切ヨ」と主張し、周囲の花々に“想像力”豊かに名前を付けていく場面があります。こちらは作品の出版100周年の年に訪れましたが、バラが文学作品の中でのいろんな形で取り上げられているのに思いを惹かれた次第です。

一方で **There's no rose without a thorn.** 「棘（とげ）のないバラは無い」、発展して「きれいなバラには棘がある」と、外見の美しさに気を取られていると危険な目に会うことがありますよ、なんて言葉もあります。原文を正確に思い出せないのですが、リア王が長女、次女に裏切られ、三女のコーデリアと嵐の中を進むなか「この人生の苦悩に比べたらバラの棘なんてなんでもない」と言った趣旨の言葉も思い出します。まとまりにないエッセイになってしまいましたが・・・。

（昨年5月のこの欄で「ツツジの花」を女性に見立てて面白く書いています）